ソラペン。

ハルキゲニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソラペン。

【Ｎコード】
Ｎ５０９２ＢＡ

【作者名】
ハルキゲニア

【あらすじ】
漫画家として活躍するひきこもり少女、その世話を焼く主人公。二人の温かくも寂しい世界に、問答無用の突風が吹き抜ける。「私にひれ伏しなさい。とりあえずもっとコーヒーゼリーを持ってくるのよ。早く！　早くして！　あれがないと、私耐えられないの。お願い、コーヒーゼリーをちょうだい。何でもしますからぁ」吹き飛ばされた二人が見たものは、眩しくて少し騒々しい新しい世界だった。

運命ノ出会イ

あるいはそれは一目惚れだったのかも知れない。
ガラス越しに通りを見つめるつぶらな瞳。それは不思議な光沢を持っていて、微笑んでいるようにも、憂いを秘めているようにも見える。
その瞳を覗きこんだ瞬間、俺は運命を確信した。

そして世界が変わった。

街の雑踏が遠く聞こえ、代わりにオルゴールのような可憐な音色が空間を満たす。この空間は甘ったるい色彩で彩られている。下手に息を吸い込むとむせ返りそうだ。普段俺が生きている世界とは多分位相が違う。パラレルワールドの端から端までワープしてしまったんじゃないか？
俺は異邦人のように拠り所をなくして、ただ立ち尽くしていた。

「あの、どうしましたか？」

耳の奥がくすぐったくなるような、少しかすれた声。自分の顔が火照っているのが分かる。赤面していないか心配で、まともに目を合わせることができない。
「いえ、お構いなく、じゃなくて、ええと」
上手く言葉が出てこない。心配そうにこちらを窺う視線から、オレは逃れられない。
じっとりと汗ばむ手を何度か閉じたり開いたりしつつ、やっとの思いで口を開く。
「ショウウィンドのペンギンのぬいぐるみを頂きたいんですけど。このくらいのやつ」

「はい、かしこまりました。レジの方で少々お待ちください」
愛想よく微笑んで、店員さんはショウウィンドへ商品を取りに向かった。
オレは大きく息を吐いて、しばし放心する。
ファンシーショップの店内だ。男の自分にとって、これ程居心地の悪い空間はない。恋人か女友達にでもついて来てもらえばよいのだろうが、あいにく恋人などおらず、唯一の女友達は重度の引きこもり。しかも今買っているものはそいつへの誕生日プレゼントだから、ついて来てもらうのも無粋だろう。
女性客の視線を避けるように商品棚の影を縫ってレジまでたどり着くと、先ほどの店員さんがすでにぬいぐるみを包装しはじめていた。
「ラッピングのご要望はございますか？」
「えと、その、適当に、お願いします」
「はい。もう少々お待ち下さいね」
やはり微笑んでくれる。こちらの居心地の悪さを察してくれているのだろうか。まぁ、俺が勝手に尻込みしているだけで、店員も客も思うほどこちらのことを気にしてなどいないのだろうが。
ペンギンがふわふわしたひもやハート型の飾りとともに、透明な包装紙にくるまれてゆく。
「……」
やはりこのペンギンからは何かを感じる。
なんだろう？　一見ただのぬいぐるみでしかないのだが、妙な存在感を放っていやがる。マネキンから時折感じる気配と似ているかも知れない。
じっとその目を見つめていると、なんだか見つめ返されているような気がしてきて、俺は目を逸らした。なんとなく負けた気がした。
小奇麗にラッピングされたぬいぐるみを、そのまま持ち歩くのが恥ずかしいのでさらに不透明な袋に入れてもらって、ようやくその

異世界から脱出する。
「ありがとうございました」
言われるがままにポイントカードまで作ってしまった。
もう少し堂々としていたかったが、まだまだ精進が足りんな。というか自意識が過剰だ。
小さくため息を吐いて、歩き始める。
妙に疲れてしまった。さっさと帰ろう。
「元々はお高いチョコレートでも買うつもりだったが、まああいつは子供っぽいし、これでよろこんでくれるだろ」
まだ冷たい早春の風が吹き抜ける通りを歩きながら、独りごちる。
オレはまだ知る由もなかった。この時の出会いが、まさに運命とでも呼ぶべきもので、この先の未来を大きく変える転換点であったことを。

指輪1

「あ、ケーキ忘れた」
「え～、まじで。ケーキのない誕生日なんて山田君のいない笑点とおんなじなだよぉ」
「…それはどっちの意味の例えだ？」
チョコレートをデパチカへ買いに行くのをやめたせいで、同じ場所で買おうとしていたケーキのことを忘れてしまっていた。ファンシーショップでの精神力をひどく消耗したことも大きな原因だろう。
由紀はテーブルに両肘をついて頬を膨らませている。
俺は今揚げたばかりのカニクリームコロッケを菜箸で由紀に差し出した。
「ほれ、あ～ん」
「あ～ん…あむ。あふっ！　あふいお！　あふあふあふ…んぐ。うまっ！　まじうまっ！」
元々本気で拗ねていたわけではないのだろう。すっかり上機嫌の由紀を見ながら、明日ケーキを買って来てやろうと思った。

由紀は俺と同い年で、本来ならそろそろ受験生と呼ばれる年齢ではあるが、学校には通っていない。引きこもりだ。しかしいわゆるニートではなく、ちゃんと仕事をしている。「漫画家」というのが由紀の職業で、青年漫画雑誌に四コマ漫画を連載中。それで稼いだ金で部屋を借り、実家からも独立しているのだが、そこは引きこもりで、買い物すら自分で行こうとしない。よって古い馴染みである俺が色々と世話を焼いているのであった。
なぜ部屋から出ようとしないのか、由紀は理由をはっきりと話そうとしない。俺も深く問い詰めようとは思っていないが、隠し事をされるのは少し寂しく感じている。

「ごちそうさまでした」
「はいよ。お粗末さん」
「おいしゅうございました。いつもありがとね」
こういう時由紀は本当に可愛らしく笑う。この笑顔に上手く利用されているのではないかと、時々思ったりもする。
「それはそれとして、ね、マサルさん」
「何でしょうか、由紀さん」
「ボクはさっきからあの袋が気になって気になって仕方がないんだけど、何が入っているんだろうね？　とっても気になるんだよ～」
「ああ」
忘れていた。由紀の視線の先にはキッチンの隅に無造作に置かれたファンシーショップの袋がある。
椅子に座ったまま手を伸ばして手繰り寄せて、その袋を由紀に渡してやる。
「誕生日おめでとう」
「ふふ。ありがと」
「頼むから気に入らないとか言ってくれるなよ？　そいつを手に入れるために俺は相当な羞恥プレイをだな…」
「わ、ペンギンだ。ぬいぐるみだ。意外だ。マサルがこんなの買ってくるなんて。しかもカワイイし。めっちゃカワイイし。しかもこの大きさが、腕の中にすっぽりとジャストフィットな感じが、もう何ていうか、何だろう？」
「何なんだよ」
外してはいなかったようで、取りあえず安心した。
ぬいぐるみと戯れている由紀を眺める。これが俺にとってのかけがえのない日常。大切なもの。だからこそ失うことが恐ろしいし、守ろうと努力する。しかし囁きが聞こえるのだ。俺の中の、沢山の俺の中の一人が内耳の辺りにやってきて、直接俺の聴覚神経に語りかけるのだ。

「それでいいのか？」
何がだよ。
「由紀を閉じ込めて、俺も一緒に閉じこもって、それで幸せになれるのか？」
なれるさ。邪魔するものはいない。壊される要因がない。
「井の中の蛙、大海を知らず。確かに蛙は幸せだろうさ。大海を知らないのだから。しかし俺は知っている。由紀だって知っている。１ＤＫの外には広い世界があるってことをな。暗い井戸の底で潮騒を聞きながら空ばかり見上げることになるんじゃないのか？」
…。
「……」
……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5092ba/

ソラペン。

2012年1月15日03時22分発行